

國學院大學學術情報リポジトリ

禅林寺宗叡の入唐とその後

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 真如, 五臺山, 千僧供養, 清和天皇, 護持僧 キーワード (En): 作成者: 佐藤, 長門, Sato, Nagato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000956

禅林寺宗叡の入唐とその後

The Entering Tang Dynasty and the after of Zenrinji Shuei

佐藤長門

【キーワード】 真如 五臺山 千僧供養 清和天皇 護持僧

要旨

宗叡は、いわゆる入唐八家のひとりに数えられる平安前期の密教僧であるが、彼は幼少の惟仁親王（のちの清和天皇）に近侍し、その御願をはたすために五臺山への巡礼を決意して、真如の入唐に加わる形で貞観四年（八六二）、唐の咸通三年）に渡海した。入唐後の宗叡はしばらく真如一行と行動をともにしていたが、汴州で玄慶阿闍梨から灌頂を受け、金剛界法を学んだのち、清和天皇の御願である千僧供養をおこなうために一行と別れ、五臺山へと向かった。五臺山での宗叡はまず、西臺の「維摩詰（談）石」を訪れ、次いで東臺の「那羅延窟」に赴いている。なぜ彼がそれら聖跡の存在を知っていたかという点、その地は先に五臺山を巡礼していた円仁の経験から学んだものだったと考えられる。大華嚴寺で千僧供養を終えると、宗叡は長安に入って青龍寺の法全から灌頂と胎藏界法を学び、ほかにも慈恩寺の造玄や興善寺の智慧輪などを尋ねて密教の秘奥を受けたが、それらも円仁や円珍らがかつて受法した中国僧たちであり、宗叡の修学行動はそのほとんどが先輩僧の経験や情報にもとづくものであった。貞観七年に帰国した彼は、清和天皇との関係から権律師、権少僧都に就位し、元慶三年には僧正に任じられた。讓位後の清和太上天皇が元慶三年に落飾入道した際にも宗叡が受戒しており、清和が山城・大和・摂津の名山・仏寺を巡行したときにも同行したが、清和が臨終する際に近侍していたとする史料はみあたらない。

はじめに

平安時代前期（九世紀）に活躍した真言宗の僧侶で、いわゆる入唐八家のひとり数えられる宗叡の入唐以前の動向については以前、別稿²⁾で検討したことがある。それによれば、十四歳で出家をした宗叡は比叡山で具足戒を受けたが、その後に山を下りて法相宗を学んだのち、園城寺で円珍から両部大法を受法した。白山での山林修行を経て帰京すると、なぜか比叡山には戻らず、東寺に移って真紹に師事し、皇太子惟仁親王に近侍することになる。宗叡が天台宗から法相宗、そして真言宗へと「改宗」したのは、その時期が日本に密教が本格的に伝えられて間もない草創期にあたり、宗叡のみならず、密教を深く学ぼうとする者たちにとっては試行錯誤の時期であったからと思われる。ただし前稿では、紙幅の関係で入唐以前のことのみに言及をとどめ、宗叡が入唐した経緯や在唐中の行動、帰国後の動向などについては省略せざるを得なかった。よって本稿では、前稿で省略した入唐以後の宗叡の活動について、検討していくことにする。

1. 入唐求法

周知のことではあるが、入唐八家をどのような手段で渡海したのかという観点から分類すると、遣唐使に従って留学僧、あるいは請益僧³⁾として入唐したのが最澄・空海・常曉・円行・円仁の五人であるのに対し、日本に寄港していた唐人などの船に便乗して海を渡ったのが惠運と円珍の二人となる。では右の分類に名前がない宗叡は、いかなる方法で入唐したのだろうか。後掲【史料4】にみえる「宗叡伝」には「貞観四年、高丘親王が唐に入った。宗叡は、（みずから）求めて従い、海を渡った」（傍線部^①）とあり、宗叡が高丘（高岳とも）親王⁴⁾の入唐に随行して渡海したことがわかる。

【史料1】『日本三代実録』元慶五年（八八二）十月十三日戊子条（抄出）⁵⁾

親王は、平城太上天皇の第三子なり。母は贈従三位伊勢朝臣継子、正四位下勲四等老人の女なり。云々。去ぬる大同五年、皇太子を廢せらる。親王、命を覺路に帰し、形を沙門に混じ、名を真如と曰ひて、東大寺に住む。親王、機識明敏にして、学内外に涉り、聴受領悟、罕にその人を見る。三論の宗義を律師道詮に稟受し、稍大義に通ず。また真言密教は、秘奥を究竟して、門弟子の成熟する者衆く、僧正沓演はその上首たり。詔して伝燈修行賢大法師位を授く。親王、心に自ら為へらく、真言の宗義は、師資相伝して、猶通ぜざるあり。凡そ此間に在りては、質疑すべきこと難し。沉むや復、電露の遂に空しきを觀、形骸の早く弃てらるるを顧るをやと。苦に入唐して、幽旨を了悟するを求め、乃至は、天竺を尋法せむと庶幾ふ。貞觀三年、上表して曰はく、「真如出家して以降、四十余年、三菩提を企て、一道場在り。窃かに以へらく、菩薩の道は、必ずしも一致せず。或いは戒行に住して、乃ち禪乃ち学と。而して一事もいまだ遂げざるに、余算稍く頽る。願ふ所は、諸国の山林を跋涉して、斗數の勝跡を渴仰せむ」と。勅して「請ひに依れ」と。即便ち、山陰・山陽・南海等の諸道に下知して、到る所に安置供養せしむ。四年奏請して、西唐に入らむことを擬る。適可許せられ、乃ち一船に乗り、海を渡りて唐に投ず。彼の道俗に、甚だ珍敬せらる。親王、遍く衆徳に詢ふも、疑導決し難し。書を律師道詮に送りて曰はく、「漢家の諸徳、多く論学に乏しく、歴問に意あるは、吾が師に及ぶこと無し。真言に至りては、共に言ふに足るあり」と。親王、遂に錫を杖つきて路に就き、□脚孤行す。

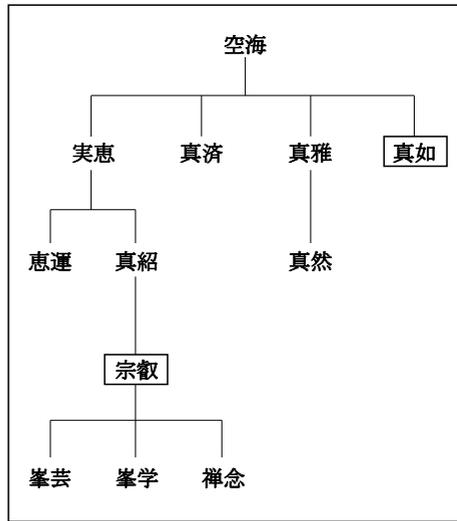
右の【史料1】は、在唐僧中瓊からの、高丘親王が羅越国(シンガポール付近)で遷化したらしいという申状を載せたあとに記された親王の略伝である。そこには親王が平城太上天皇の第三子で、大同五年(八一〇)に皇太子を廢されたのち、出家して「真如」を名乗り、律師道詮に師事して三論宗を学び、また真言密教をも学んでいたが、師資相伝しても疑問が残ったので、入唐して真髓をきわめ、あるいは天竺(インド)にも足を伸ばして仏法を学ぶことを望んでいたとある。この真如は、承和十年(八四三)以前にあつては名を「真忠」といい、入唐後には「遍明」に改めたようだが、ともかく真如が入唐以前から天竺での修学をも視野に入れていたかどうかは何ともいえない。ただし【史料1】にみえる師道詮への書信のなかで、真如が「唐の諸大徳の多くは論宗の教義にうとく、さまざまな問いへの解

答では、わが師に及ぶものはいません。(ただ)密教に関しては、ともに議論できる人がいます(傍線部)と述べていること、次の【史料2】でも青龍寺の法全から兩部大法を受けたあと、留学僧円載の勧めで懿宗(唐二十代皇帝、八三三〜八七三)の命により「法味和尚から経論を受学させたが、真如を満足させるものではなく、遂に西(天竺)に向かった」(傍線部②)とあることからすれば、真如が不満を覚えたのは密教教義というより、論宗(經典に依拠する経宗に対して、教説を解説した論書に依拠した宗派で、三論宗や法相宗などを指す)の解釈だった可能性は高く、したがって天竺を目指した目的も密教教学だけにとどまらず、論宗をふくめた仏教全般の修学にあったのではないかと思われる。

【史料2】「和州超昇寺本願法親王伝」(『弘法大師弟子譜』巻2所収、抄出)

親王、法諱は真如、平城帝の第三子なり。母は贈従六位伊勢朝臣継子、正四位下勲四等老人の女なり。大同四年四月、嵯峨帝禪りを受けて祚に即き、平城を尊んで太上皇となし、皇姪高岳を立てて太子となす。即ち親王なり。……弘仁元年九月、尚侍葉子及び藤原仲成、上皇を勧めて変を諮る。事発覺れて各誅に伏す。上皇遂に薙髮す。太子も亦廢せられ、中務卿立つ。即ち淳和帝なり。……十三年正月、王を四品に叙す。初め無品なるを以てなり。幾ばくもなくして落髮し、僧となる。名を真如と更め、緇を披きて東寺に居す。……初め三論を福貴の道詮に資してその精微を究め、①法相を修円に参聴して伝法院に棲む。また宗叡に朋依して禅林の閑室を閉せり。(参聴の下、撰集鈔)大師に敬事するに及びて、諸の密軌作法皆以て研窮し、既にして兩部の灌頂を稟け、阿闍梨位を得、教授に勤めたり。……是の年(貞観三年)、王、表を具にして唐に入り法を詢ぬることを請ふ。四年十月、請ひを得て、宗叡・禅念らと海を絶る。実に唐の咸通三年なり。青龍寺の法全闍梨に従ひて兩部の灌頂を受け、尋いで諸の名徳を遍訪す。時に留学円載その来遊することを喜び、これを懿宗帝に薦む。帝乃ち特に②法味和尚に命じて経論を授けしむ。而るに法王の意には蓋し称ふこと弗し。遂に錫を杖きて西に邁けり。

右の【史料2】は天保十三年(一八四二)に編纂された空海の弟子たちの伝記であり、同時代性という意味では史料価値は下がるものの、真如が師事した僧侶として三論宗の道詮や真言宗の空海(大師)とともに、法相宗の修円と



【真言宗、師資相承図】

本稿で論じている宗叡の名が記されている（傍線部①）。その注記によれば、このふたりについては『撰集鈔』を参照したとあるが、修円はともかくとしても、宗叡を真如の師（あるいは同輩）とみなすことはできないだろう。【史料2】にみえる「朋依」を「友のはからいによつて」と訳してよければ、真如は友人であった宗叡の世話で一室にこもって修行したことになる。しかし、上の【師資相承図】を見れば明らかのように、両者は世代的に離れていたものであり、下の世代の宗叡が二世代も上の真如に修行の場を世話するなどおそろくあり得ず、ましてや真如が宗叡に師事したことはなかったとみるべきであろう。

【史料3】「頭陀親王入唐略記」（『入唐五家伝』所収「真如親王入唐略記」、抄出）

貞観三年三月、親王入唐を許さる。……十月七日、①唐通事張友信に仰せて、船一隻を造らしむ。四年五月、船を造ること已に了はんぬ。時に鴻臚館に到る。七月中旬、宗叡和尚、賢真、恵蔓、忠全、安展、禪念、恵池、善寂、原懿、猷繼、并せて船頭高丘真今ら、及び控者十五人、（此れらは並びに伊勢氏の人なり。）柁師・絃、張友信、金文習、任仲元、（三人は並びに唐人なり。）建部福成、大鳥智丸、（二人は並びに此の間の人なり。）水手ら、僧俗合はせて六十人を率ゐ、船に駕りて鴻臚館を離れ、遠値嘉島に赴く。八月十九日、遠値嘉島に著く。九月三日、東北の風によりて帆を飛ばす。……七日午の剋、遙かに雲山を見る。未の剋、大唐明州の揚扇山に著く。申の剋、彼の石丹奥の泊に到る。（石丹奥は、明州の地名なり。）……此の歳、大唐の咸通三年九月十三日、明州、使司馬李閑を差はして、船上の人物を点検せしめ、京城に奏聞す。その年の十二月、勅符到りて云はく、「須ら

く彼の器を収め、或早く故に随ひ越州に着くを許すべし」と。五年、彼の州の觀察使鄭（暉略）更に実録をなし、転じて以て言上す。五月十一日、所々を巡札す。……十二月、親王、宗叡和尚、智聡、安展、禅念、及び興房、任仲元、仕丁丈部秋丸ら、江船に駕りて索を牽き、水に傍ひて入京す。……六年二月中旬、凍解するを得て江船に駕り、汴河に著く。鞍馬を買ひて陸より入京す。②但し宗叡和尚、宿（願）あるに依りて汴州より相列かれ、河中府の道を取りて五臺山に向かふ。……③宗叡和尚、咸通六年、長安より帰り来たりて云はく、「一件の雜物早く請け取り、尚広州に向かふべし」てへり。興房此に雜物を論じ得て、広州に添ひ起たむと欲するの間、任仲元教書を將ち来たり、「興房を待たしめども、遠からず進発の期あり、稽留すべからず。仍りて正月廿七日、安展、円覚、秋丸らを率ゐて、西に向かふこと己に了はんぬ。須らく起ち来たることを停めて、早く李延孝の船に駕りて本国に帰るべし」てへり。因りて宗叡和尚、興房ら、同年六月、延孝の船にて大唐福州より順風を得て、五日四夜にして値（嘉）島に著く。

宗叡と真如に師資関係が存したか否かについてはこれくらいにして、最初の疑問に戻ろうと思う。【史料3】に「唐通事張友信に命じて、船一隻を造らせた」（傍線部①）とあることからすると、真如一行は遣唐使とはちがつて国家の正式な朝貢使節ではなかったものの、遣唐使がその都度新たな船を建造したのに準じて船一隻をわざわざ造らせており、単に唐商人らの船に便乗した惠運や円珍らとも異なる対応がとられていた。要するに真如一行の渡海は、遣唐使の派遣になかば準じた扱いがとられており、それが中断されていた時期に入唐した円珍らの渡航方法とも異なっていたのである。それには真如の元親王という身分が関係していたことは容易に想像できるが、ともかく前述したように、宗叡はそれに「請ひ従ひて海を渡」ったとあることからすると、みずから申し出て一行に加えてもらったとみるべきなのだろう。ただその要請が、まったくの個人的な理由だったかというところではなく、後述するように宗叡の入唐には公的な理由が付与されていた。だからこそ真如も、宗叡（とその弟子）の同乗を許可したのではなかったかと思われる。

【史料4】『日本三代実録』元慶八年（八八四）三月二十六日丁亥条（抄出）

①貞観四年、高丘親王、西唐に入る。宗叡、請ひ従ひて海を渡る。初め汴州の阿闍梨玄慶に遇ひ、灌頂を受け、金剛界法を習ふ。五臺山に登攀して、聖跡を巡礼す。即ち西臺の維摩詰の石の上に、五色の雲を見、東臺の那羅延の窟の側に、聖灯及び吉祥鳥を見、聖鐘を聞く。②尋いで天台山に至り、次いで大華嚴寺に於いて、千僧に供養す。即ち是れ本朝の御願なり。青龍寺に至り、阿闍梨法全に随ひて、重ねて灌頂を受け、胎藏界法を学び、その殊旨を尽くす。阿闍梨、金剛杵并せて儀軌・法門等を以て宗叡に付属し、用て印信に充つ。更に慈恩寺の造玄・興善寺の智慧輪等の阿闍梨を尋ね、秘奥を承受し、幽蹟を詢求し、廻りて洛陽に至り、便ち聖善寺の善無畏三蔵の旧院に入る。その門徒、三蔵所持の金剛杵并せて経論・梵夾・諸尊・儀軌等を以てこれに授く。八年、明州望海鎮に到る。適李延孝の遙かに扶桑を指して一葉を泛べむとするに遇ふ。宗叡同舟して、順風に纜を解き、三日夜の間に本朝に帰着す。

さて、真如および宗叡の入唐時期であるが、史料によって若干の異同がみられる。すなわち『本朝皇胤紹運録』の高岳親王の項には「貞観二年入唐」とある一方、右の【史料4】や『入唐五家伝』所収「禅林寺僧正伝」および「真如親王入唐略記」には貞観四年に入唐したと記されている。しかし、十五世紀に成立した『本朝皇胤紹運録』の史料の価値が下がるのは当然で、真如や宗叡の入唐時期を貞観四年としても、特段の矛盾が生じるわけではないことからすれば、【史料4】に従って両者の入唐時期を貞観四年とみても問題はないだろう。

【史料3】によると、僧俗あわせて六十人が乗った船は貞観四年（八六二、唐の咸通三年）七月中旬に鴻臚館を出発し、八月十九日に遠値嘉島（現五島列島）に着岸すると、早くも九月三日には東シナ海に向けて出帆し、七日未の剋（午後一時から三時）に明州揚扇山に着き、申の剋（午後三時から五時）に石丹奥の泊に着岸した。その年の十二月に越州への移動を許可された一行はそれに従い、約一年間にわたって越州に滞在したが、咸通五年十二月にいたって入京のため越州を出発し、咸通六年二月中旬に汴河に到着した。この間、賢真、惠萼、忠全たちは、咸通五年四月に明州から日本に帰国している。明州・越州滞在時における宗叡たちの動向はあまりよくわかっていないが、東寺観智院

金剛藏所藏の「涅槃經悉曇章」の本奥書に「本に云はく、咸通三年十月廿日、明州開元寺に於いて、和上姓は馬氏に就きてこれを写す」とみえることから、このころ宗叡は明州開元寺において「涅槃經悉曇章」を写写していたことがわかる。¹³ この「涅槃經悉曇章」は宗叡の将来目録である「書写請求法門等目録」¹⁴にも「涅槃經悉曇章一卷（羅什三蔵翻訳）九張」としてみえており、おそらく同一のものでみてまちがいないだろう。¹⁵

宗叡は汴州（現河南省開封市付近）の玄慶阿闍梨から灌頂を受け、金剛界法を学んだ（【史料4】のち、「宿願があるため汴州（真如一行と）別れ、河中府の道をとって五臺山に向かった」（【史料3】傍線部②）とあるように、汴州で真如らといったん別れて五臺山に向かい、聖跡の巡礼をおこなうのである。【史料4】の記載順によれば、五臺山での宗叡はまず西臺の「維摩詰（談石）」を訪れて石の上に五色の雲をみ、次いで東臺の「那羅延窟」に赴いて聖灯と吉祥鳥をみ、聖鐘を聞いたという。なぜ宗叡がこれら聖跡の存在を知っていたのかというと、彼の前にこの地を訪問し、それを記録していた人物がいたからである。

【史料5】『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月二十日条（抄出）

臺の西より坂を下り、行くこと五六里、谷に近く文殊と維摩と対談の処あり。両箇の大巖は相對して高起し、一は南一は北、高さは各三丈許り。巖上は皆平かにして、皆大石の座あり。相伝へて云はく、「文殊師利菩薩と維摩と相見え対談する処」と。

【史料6】『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月二十二日条（抄出）

臺頂より東に向かひて直ちに下ること半里の地、峻崖の上に窟あり。名づけて那羅延窟となす。人の云はく、「昔者、那羅延仏この窟に於いて行道し、後に西に向かひて去る」と。窟内湿润にして水滴る。戸の濶さ六尺。窟内黑暗にして、宜しく龍ありて潜み藏るべし。

その人物とは、右の『入唐求法巡礼行記』を著した円仁のことで、彼もまた五臺山西臺で文殊菩薩と維摩居士（維摩詰）が対談した大岩をみ、東臺で那羅延仏（ヒンドゥー教のヴィシュヌ神が仏教に取り入れられた護法善神、金剛力士とも）が修行したと伝わる窟を訪れていたことが【史料5・6】から確かめられる。円仁は五臺山で中国仏教の

儀礼を体験し、天台僧の講義を聴き、日本に伝来していない天台經典を書写しているが、入唐の目的のひとつであった比叡山からの疑問が、すでに天台山国清寺（実は禅林寺の広修）から示されたことを知り、その後は五臺山の巡礼に切り替えている。円仁の五臺山巡行は、天台山巡行の代替といえるもので、五臺山では密教を求法する予定はなかったのかもしれない。事実、五臺山では若干の天台宗受学と巡礼にいそしんでおり、宗叡もその後の千僧供養のほかは五臺山の巡礼に専念していることから、宗叡の行動は円仁のそれをなぞったものと考えられるかもしれない。

宗叡が一行と別れて五臺山に向かった理由について、高見寛恭は「清和天皇の御願である千僧供養を五台山に於いて果さんが為に、一路長安に向う親王と一先づ袂を分っている」と述べている。²⁰ 西臺・東臺の聖跡を巡礼したのち、【史料4】には「尋いで天台山に至り、次いで大華嚴寺に於いて千僧に供養した。これは即ち本朝の御願である」（傍線部^②）とあるのでまぎらわしいが、文中の大華嚴寺とは現在の顕通寺のことで、五臺山の中心的寺院のひとつである。よって「尋いで天台山に至り」はまちがいか不必要な文言ということになり、高見のいうように宗叡は清和天皇御願による千僧供養をおこなうため、五臺山に向かったことになる。

【史料7】『入唐求法巡礼行記』会昌二年（八四二）二月二十九日条
 玄法寺法全阿闍梨の所に於いて、始めて胎藏大法を受く。また大安国寺元簡阿闍梨の所に於いて、重ねて悉曇章を決す。

【史料8】『天台宗延暦寺座主円珍伝』大中九年（八五五）十一月五日条（抄出）

五更、両部大教阿闍梨位灌頂を伝授せらる。即ち般若母菩薩、大虚空藏菩薩、転法輪大菩薩を得。和尚（法）（法）記を授けて曰はく、「汝、大毘盧遮那経般若母の加持を蒙る。阿字法性の大空に遊歩し、一切如来の最上乘教を伝へよ」とへり。

【史料9】『入唐求法行歴』大中九年（八五五）五月二十五日条

丁満入城し、常楽坊近くの南門街に於いて、玄法寺法全阿闍梨に逢着す。便ち地に伏して拝す。和上恠しみ問ふ

に、「若しやこれ円仁闍梨の行者や否や」と。丁満「爾り」と答ふ。「何事に因りて、更に来たれるや」と。「本国の師僧に随ひて来、特に和尚を尋ぬ」と。和尚喜歎し、便ち領將して青龍寺西南角の浄土院の和上の房に去き、茶飯を与へたり。便ち語を伝へ来たり、円珍を存問す。

【史料10】『入唐求法巡礼行記』会昌元年（八四一）二月十三日（抄出）

金剛界大法を受け畢はんぬ。金剛界曼荼羅を供養し、及び伝法灌頂を受く。五瓶の水を以て頂上に灌ぐ。夜に至りて十二天に供す。毎事、吉祥なり。兼ねて慈恩寺の塔に登る。

【史料11】『天台宗延曆寺座主円珍伝』大中九年（八五五）十一月六日条（抄出）

復冬至の日、街東大興善寺不空三藏和尚の院に至り、三藏和尚の骨塔を礼拝す。并せて三藏第三代伝法弟子三藏沙門智慧輪阿闍梨に見え、道場に参入し、聖衆を礼拝し、両部大曼荼羅教の秘旨を諍承し、兼ねて新訳持念経法を授かる。……次いで莊嚴、西明、慈恩、興福、崇福、薦福寺らを巡る。

【史料12】『天台宗延曆寺座主円珍伝』大中九年（八五五）十二月十八日条（抄出）

閑に乗じて大聖善寺善无畏三藏の旧院に詣で、真容を礼拝す。

清和天皇の御願である千僧供養を大華嚴寺で無事に終えたのち、宗叡は長安に移動し青龍寺の法全から灌頂を受けて胎藏界法を学び、金剛杵や儀軌・法門等を授けて伝授の印信（証拠）となし、また慈恩寺の造玄や興善寺の智慧輪などを尋ねて密教の秘奥を継受され、さらに洛陽に移つて聖善寺の善無畏三藏の旧院に入ると、その門徒から善無畏が使用していた金剛杵、経論、梵夾、諸尊、儀軌などが送られている（史料4）。法全とは、円仁（史料7）や円珍（史料8）も受法した僧侶で、【史料9】によれば円珍は詠語の丁満（丁小麻呂・丁雄満）を旧居の玄法寺に向かわせたが、たまたま道で法全と遭遇し、現在は青龍寺に移居していることを知ったことから、円珍は円仁からの情報によって法全への面会と受学を決めていたことになる。この法全から宗叡も胎藏界法を学んだということであり、そのほかにも慈恩寺は円仁・円珍とも訪れていたことが【史料10・11】からわかり、興善寺の智慧輪も円珍がすでに面会して諮問していた僧侶で（史料11）、善無畏の旧院も円珍が訪れていた（史料12）。

このように、宗叡がそれ以前に入唐していた先輩僧からの情報を頼りに修学していたと考えられることは、宗叡が真言宗に「転身」したのちも、円仁や円珍らから中国仏教界の情報を得ていた可能性を強く示唆するものである。そして宗叡がこのような修学の仕方を選択した（せざるを得なかった）のは、彼らの滞在期間が限られていたことに加え、かかる状況のなかでもっとも効率的な修学をするにはどうしたらよいかを考えた結果ととらえられよう。

2. 帰国後の動向

【史料4】によれば、宗叡は貞観八年（八六六）に明州望海鎮から李延孝の船に同乗して帰国したとある。それに対して少々わかりづらいのが【史料3】の記事で、傍線部③の部分を読すと、「咸通六年（八六五、貞観七年）に長安から戻ってきた宗叡が『早く雑物を受けとって、広州に向かうべきでしょう』というので、伊勢興房が広州に赴こうとしていたところ、任仲元が（真如の）教書をもたらし『興房（の）出発を待たせたとしても、近く船が（日本に）出航するようなので、躊躇している時間はない。正月二十七日には安展、円覚らを率いて西に向かわせた。（広州に）出発するのをやめて、李延孝の船に乗って日本に帰国すべきだ』と伝えてきた。よって宗叡や興房らは、同年六月に李延孝の船で福州から帰国した」ということになる。このふたつの史料で異なっている点は、宗叡一行が離岸した地名を【史料4】では「明州」としているのに対し、【史料3】では「福州」としていることがまずあげられる。それとともに【史料3】で問題なのは、ここにみえる「同年六月」を咸通六年（貞観七年）とみるべきなのか、あるいはそれ以前に安展や円覚らが「正月二十七日」に西に移っているのを年が改まってからとみなして、【史料4】と同じく咸通七年（貞観八年）ととらえるべきなのかということである。

帰国後の宗叡が自身の入唐修学の成果をまとめた「書写請来法門等目錄」²⁶には、「大唐咸通六年、六月より十月まで、長安城右街西明寺日本留学僧円載法師の院に於いて求め写す雑の法門等の目錄、具に右の如きなり。日本貞観七年十一月十二日、左京東寺に却り来たり、重ねて勘定す。入唐請益大師位（後のためこれを記す。）」とあり、宗

叡は貞観七年十一月には東寺で請来した經典類を再度点検している。⁽²⁶⁾ このことを重視すれば、【史料4】の貞観八年に帰国したとの記事は誤りで、宗叡は貞観七年に帰国したことになる。宗叡は咸通六年二月に五臺山に向かい、六月から十月にかけて長安に戻って經典類を書写したが、【史料3】の「正月二十七日」は宗叡らが五臺山に向かうため真如一行と別れた二月中旬より以前の出来事を記したものとすれば、とくに齟齬なく解釈が可能になると思われる。⁽²⁷⁾

【史料13】『日本三代実録』元慶三年（八七九）十月廿三日己卯条（抄出）

策命して曰はく、「天皇が詔命らまと法師たちに白さへと宣りたまふ大命を白す。権少僧都法眼和尚位宗叡は、太上天皇の幼少に御坐しし時より護持し仕へ奉れる事もあり、今も亦怠らず仕へ奉るに依りて、故是を以て殊に僧正に任し賜ひ治め賜ふ。……」と。

【史料14】『日本三代実録』貞観十六年（八七四）八月廿四日庚辰条（抄出）

権律師法橋上人位宗叡、予ねて御願寺を造り、山城国愛宕郡栗栖野に在り。堂舎顛覆す。仏像は元北山の高岑寺に在り。貞観十三年の大雨水のとき、自然に大巖石を以てその道路を塞ぎ、行人通はず。高岑寺を去りて栗栖野に移し立つ。また去年京師に大いに雹雨る。時の人皆曰はく、「此の三度の災は、彼の像に因りて発る」と。

【史料15】『日本三代実録』元慶二年（八七八）四月九日甲戌条（抄出）

権少僧都法眼和尚位宗叡奏言すらく、「薬師寺の法相宗伝灯大法師位義澄、同宗伝灯大法師位義叡、東大寺の律宗伝灯大法師位忠城、華嚴宗伝灯大法師位心恵らの四人、真言を兼学して師範となすに堪ふ。伏して願はくは、修行伝灯賢大法師位真如の本願に随ひて、超昇寺に入住せしめむ」と。詔してこれを従す。

宗叡はその後、貞観十一年（八六九）正月に権律師に任命され、貞観十六年（八七四）十二月には権少僧都、元慶三年（八七九）十月には「太上天皇が幼少のころより、護持してお仕えしており、いまもまた怠らずにお仕えしている」との理由から僧正に任命される（【史料13】）。この間、貞観十年（八六九）に師の真紹から禅林寺を譲られたことは前稿で述べたが、『日本三代実録』には貞観十六年八月に宗叡が山城国愛宕郡栗栖野に造った御願寺の堂舎が風雨によって転覆した記事がみえ（【史料14】）、元慶二年（八七八）四月には薬師寺の義澄、義叡、東大寺の忠城、心恵ら

四人は真言を兼学して師範に堪える人物なので、真紹の本願に随つて超昇寺に入住せしめたいと奏言して許された
とある（史料15）。また宮内庁書陵部所蔵柳原家旧蔵『東寺長者補任』上によれば、宗叡は貞観十八年（八七六）に
東寺第二長者となり、元慶三年（八七九）正月には真雅僧正の卒去にもなつて東寺長者（第五世）に就任したとある
が、同じ『東寺長者補任』の元慶八年段には「（貞観）十六年十二月廿九日、権少僧都に転じ、東大寺別当を兼ね」と
も記されている。しかし、『東大寺別当次第』には宗叡が東大寺別当になったという記載はみられないことから、誤
伝の可能性が高いのではないかと思われる。

【史料16】『日本三代実録』元慶四年（八八〇）十二月四日癸未条（抄出）

是の日、申の二刻、太上天皇、円覚寺に崩す。時に春秋卅一。……時に真雅法師あり、降誕の初めより聖躬を侍
護す。……真雅遷化し、復僧正宗叡法師あり。唐に入りて法を求め、真言を受得す。天皇に勧め奉りて、香火の
因を結ぶ。皇位を遜りてより、清和院に御し、念を苦空に帰し、心を菩提に発し、朝夕の膳には、菜蔬御に在
り、妍状豊姿には、顔色を賜はず、嬾私寵引、斯れよりして断つ。遂に山庄に御して、落飾入道す。是の時、僧
正宗叡侍る。山庄は即ち是れ円覚寺なり。天皇、事を頭陀に寄せ、意を経行に切にし、便ち名山仏壠を歴覽せむ
と欲す。是に於いて山城国貞観寺より始めて、大和国東大寺、香山、神野、比蘇、龍門、大瀧、摂津国勝尾山、
諸の名ある処に至るまで、経廻して仏に礼し、或る処には留住して、旬を踰えて乃ち去り、勝尾山より、山城国
海印寺に帰り、俄にして丹波国水尾山に入り、定めて終焉の地となす。自後酒酢塩豉を御さず、二三日を隔て
て、一たび斎飯を進め、六時の苦修、焦毀削るが如し。業累を断除して、禅念逾劇しく、恒に此の身を厭ひ
て、膳を御さずして捨てむと欲す。夫の沙門修練者の難行とする所、緇徒精進者の高迹となすに至りては、尊き
こと極に居ると雖も、尽くしてこれを踏む。寝疾大漸して、近侍の僧らに命じて、金剛輪陀羅尼を誦せしめ、正
しく西方に向かひて、結跏趺坐し、手に結定の印を作りて崩す。震儀動かす、儼然として生けるが若く、念珠猶
懸りて、御手に在り。梓宮は棺に御し、その制輿に同じ。聖躬坐崩せしを以て、遂に類臥せざるなり。遺詔して
中野に火葬し、山陵を起らず、百官及び諸国をして、拳哀素服せしめず、亦縁葬の諸司を任ずる勿からしめ、喪

事に須^{もち}る所、惣^{すべ}て省約に従はしむ。

前述したように、宗叡が清和天皇と深い縁に結ばれていたことは、その入唐の目的のひとつが五臺山で千僧供養をおこなうとの清和の宿願を果たすためであった点、宗叡の僧正任命が清和の幼少時から継続して仕えてきたことを理由としている点などからも明らかであるが、右の清和太上天皇の崩伝〔史料16〕にも両者の関係が特記されている。すなわちそこには、清和が誕生した当初は空海の弟にあたる真雅が親王を侍護していたが、その遷化後には宗叡が親王護持の役割を引き継いだこと、唐からの帰国後には天皇に出家を導き、讓位後に「山庄」(藤原基経の山庄、のちの円覚寺)で落飾入道した際にも宗叡が近侍していたこと、出家後の清和は山城国貞観寺、大和国東大寺、香山、神野、比蘇、龍門、大瀧、撰津国勝尾山、山城国海印寺などの名山・仏寺をめぐり、丹波の水尾山を終焉の地と定め、絶食をともなう厳しい苦行を実践して円覚寺で亡くなったことなどが記されている。【史料16】には記されていないが、次の【史料17】の傍線部によると、清和の名山巡礼には宗叡も同行し先導していたとある。

【史料17】『日本三代実録』元慶八年(八八四)三月二十六日丁亥条(抄出)

(貞観)十一年春、権律師となり、十六年冬、権少僧都に転じ、天皇に金剛界大毘盧遮那三摩地法・観自在菩薩秘密真言法を授け奉る。また国家の奉^{おんたの}為に、胎藏・金剛両部の大曼荼羅を造り、宮中修法院持念堂に安置す。十一年、天皇、清和院に遷御し、位を皇太子に譲り、仏道に帰念して、深く苦空を悟る。宗叡、太上天皇に勧め奉りて、華嚴・涅槃等の大乘経を聴学せしむ。元慶三年夏四月、太上天皇、円覚寺に遷御して、別落入道し、灌頂の法壇を設けて、仏性三摩耶秘密乘戒を受け、衣服・臥具・珍宝・車乘を以て、宗叡に嚙^{くは}施す。是に於いて、東寺・東大・延暦等の諸寺に分捨して、一物も己^{おのれ}に入れず。是の年の冬、僧正の位に至る。太上天皇、山城・大和・撰津等の国の名山・仏寺を巡覽す。宗叡従ひ奉りて引導し、丹波国水尾山に到り、以て終焉の地となす。和尚は性沈重にして、言談を好まず。齋食に当たりては、口に濃淡を言はず、いまだ嘗て寝に衣裳を脱がず、念珠手を離れず。年七十六にして、禅林寺に終はる。

【史料17】は前掲【史料4】に続く宗叡の卒伝の一部であるが、それには貞観十六年に宗叡が権少僧都に就任したの

ち、清和天皇に金剛界大毘盧遮那三摩地法と観自在菩薩秘密真言法を授け、国家安寧を願って胎藏金剛両部の大曼荼羅を造り、宮中修法持念堂に安置したこと、清和が讓位すると華嚴・涅槃等の大乘経を聴学せしめ、元慶三年（八七九）五月に太上天皇が落飾すると仏性三摩耶秘密乗戒を授け、衣服・臥具・珍宝・車乗が喜捨されると、それらを東寺・東大寺・延暦寺等に分捨して、ひとつも自分のものになかったと記されている。ここにみえる諸寺のうち、東密と関係の深い東寺・東大寺が分与の対象になったのは容易に理解できるが、施入先として延暦寺が入っているのは、宗叡が真言宗へ宗旨替えをしたのちも、彼と天台宗との関係が途絶えていなかったことを物語っているとも考えられる。

以上みてきたように、宗叡は清和天皇の護持僧として終始その傍らに近侍してきた僧侶であった。しかし、清和の臨終の場に宗叡が仕えていたことを示す史料はみあたらない。【史料16・17】はそれぞれ清和天皇の崩伝と宗叡の卒伝の一部を抄出したものにすぎないが、その全体を確認しても宗叡が清和の最期を看取ったとする記事はない。この点について吉田一彦は、清和の「臨終の間際には禅念という僧がつかえていた」と述べている³⁶。たしかに【史料16】の傍線部には「禅念」という語がみえるものの、それは宗叡に同行して入唐した弟子の禅念のことではなく、「修行への想い」といった意味で使用されており、傍線部を訳すると「累々と連なる因果を断ち切つて除き、修行への想いはいよいよ激しくなり、常に自身の身体を厭い、食事をとらずに捨てようとした」ということにでもなるだろうか。結局、清和の死に立ち会った「近侍の僧」が誰だったのかは現存史料からは不明といわざるを得ず、宗叡がその場にかけてたか否かも判然としない。ただ、清和の死から遅れること四年後の元慶八年（八八四）三月に、宗叡もこの世を去るのである。

むすびにかえて

いわゆる入唐八家のなかで、宗叡はどのように評価されてきたのだろうか。建築史家の大家で文献史学にも造詣が

深かった福山敏男は、「空海に始まるわが国の真言宗の系統のうち、空海・実恵・真紹・宗叡という系譜は主流をなすもので、いわばその名門と目されていた」と述べている。³⁸⁾ それに対して仏教史家の藺田香融は、空海後の真言宗は東寺の実恵・真紹・宗叡と高野山の真雅・真然が対立しており、「真言宗に入唐五家あり、新しい教学と儀軌の輸入に力が注がれたが、宗勢の発展にはあまり役立たなかつたのは、これまた宗内不統一のためといわざるをえぬ」と評し、そのなかで「東寺のために寄与するところのあつたのは宗叡(八〇九〜八四)ひとりにすぎない」と記している。³⁹⁾ なお、藺田が例示した「入唐五家」とは、空海後に入唐した真言僧の真如・常暁・円行・恵運・宗叡の五人を指す言葉であり、彼らの略歴は『入唐五家伝』にまとめられている。

『入唐五家伝』の編纂意図については、いわゆる入唐八家を下敷きにして、後宇多法皇による東寺興隆の立願を受け、東寺の独自性や優位性を喧伝するため、八家中の真言僧で別格の空海を除く恵運・宗叡・常暁・円行に、日本僧としてはじめて入竺を志した真如を加えてその伝記を編纂したものとの見解が提示されている。⁴⁰⁾ 彼らのうち、承和の遣唐使に同行した常暁・円行は、前者が三論宗の留学僧、後者が真言宗の請益僧として留学をしたものの、常暁は入京を許されずに揚州で太元帥法を学び、円行は真済・真然の代わりに入唐したにすぎず、両者とも空海請来の真言宗を新たに発展・展開させようとしたものではなかつた。⁴¹⁾ 恵運の入唐の経緯については、史料上の制約もあって不明な点が多い。ただ帰国後に、文徳天皇の生母にあたる藤原順子の発願で建立された安祥寺の開山となったことから、もともと天皇家や摂関家との関連が深い人物であつたと推定されている。⁴²⁾ 彼もまた、真言教団全体の意図で入唐をはたしたのではなかつた可能性が高いだろう。そして宗叡であるが、前稿で述べたように、彼は東密系からも園城寺系からも「後入唐」と称された人物ではあるものの、その入唐の主目的は清和天皇から託された千僧供養を五臺山で実施することであり、それ以外の修学は先輩僧の経験をなぞる、東密にとつては「復習・再学修」とでもいうべきものだった。

よつて以上の四人のほか、異郷で客死した真如を加えた「入唐五家」が、最澄・空海のみならず、ほぼ同時代に入唐した円仁や円珍と比べても、一般になじみが薄いのは故なしとしない。かかる先輩僧の経験をなぞる修学の仕方

は、かざられた修学期間から致し方なかったとはいえ、新たな学問を学び日本にもたらすことにはつながりにくく、彼ら「入唐五家」の経験がその後の密教の教法的展開に寄与することはほとんどなかったのである。前稿で述べたように、宗叡はその入唐経験を評価されて、空海あるいは円珍の後継者的存在に比定されることがあった。しかしその宗叡であつても、彼の功績とされているのは、理趣経曼荼羅中の愛染明王の図像において、空海請来の図像が頸をまっすぐに描かれているのに対し、宗叡が請来してきたものはいささか頸を左に傾けて描かれており、中世の東寺では宗叡請来図が基本形となつていったことくらいしか指摘がない⁽⁴⁾。その点でも、宗叡たち「入唐五家」は、あくまで中世的価値観にもとづいて集められた真言系の僧侶であつたと総括することができるだろう。

註

- (1) 九世紀前半に海を渡り、唐で密教を学んで日本にもたらした八人の僧侶、すなわち最澄・空海・常晁・円行・円仁・惠運・円珍・宗叡を指す。
- (2) 拙稿「禅林寺宗叡の密教修学」(『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』五五輯、二〇二四年)。以下ではこれを前稿と称する。
- (3) 留学生(留学僧・学問僧)が遣唐使などに随行して海を渡り、次の遣唐使が派遣されるまでの二〇—三〇年の長期にわたり、学問や技能、芸術などを学ぶ者たちであつたのに対し、請益生(請益生僧・還学僧)は同じく遣唐使などに従つて渡海するものの、学問(教義)上や技術上の疑問を中国の学者・高僧・名人などに問い、遣唐使にもなつて短期で帰国する者たちであつた。たとえば遣唐使とともに入唐した僧侶のうち、留学僧であつたのは延暦度の空海、承和度の円載(天台宗)・常晁(三論宗)・真然(真言宗、渡海せず)などであるのに対し、請益生僧は延暦度の最澄、承和度の円仁(天台宗)・戒明(法相宗)・真洛(真言宗、渡海せず)・円行(真言宗)などが相当する。なお留学僧や請益生僧については、拙稿「円仁と遣唐使・留学生」(鈴木靖民編『円仁とその時代』所収、高志書院、二〇〇九年)などを参照。
- (4) 高丘親王(出家後は真如)については、田島公「真如(高丘)親王一行の「入唐」の旅—「頭陀親王入唐略記」を読む—」(『歴史と地理』五〇二、一九九七年)や佐伯有清『高丘親王入唐記—廢太子と虎害伝説の真相—』(吉川弘文館、二〇〇二年)などを参照。
- (5) なお『日本三代実録』の頭注には、一行目の「去大同五年廢」皇太子」より最後の「脚孤行」までは『扶桑略記』によっておぎなつた箇所であることが記されている。
- (6) 【史料1】以外にも、『日本三代実録』には貞観二年(八六〇)十月十五日辛卯条に「真如は平城太上天皇の皇子にして、弘仁の廢皇太

- 子なり」、また貞観九年（八六七）七月十二日己酉条にも「弘仁の廢皇太子、入道して僧となり、真言宗の阿闍梨となる。その名は真如なり」などとある。
- (7) 橋本進吉『高岳親王の御事蹟に關する二の研究』（傳記・典籍研究）所収、岩波書店、一九七二年、初出は一九一九年。
- (8) 『弘法大師伝全集』第十所収（ビタカ、一九七七年復刻。なお適宜、読みを若干修正した。
- (9) この時期にはまだ禪林寺は創建されていないので、「禪林」は修行のための一室と解釈した。なお禪林寺については、前稿を参照のこと。
- (10) 前稿で述べたように、宗叡の生年は大同四年（八〇九）で、出家したのは弘仁十四年（八三三、十四歳）であった（『日本三代実録』元慶八年（八八四）三月二十六日丁亥条）。一方の真如については、大同四年四月に立太子した（『日本後紀』大同四年四月己丑（十四日）条）ものの、大同五年の政変（平城上皇の変）によって廢太子され（『日本後紀』大同五年九月庚戌（十三日）条、【史料2】より弘仁十三年（八二二）に出家したとされている。このように、両者が出家した年次は近接しており、高丘親王（真如）が誕生後まもなく立太子されたと仮定すれば、両者の年齢もほぼ同じになる。しかし、たとえそうであったとしても、ともに修行中の両者が友誼を結び、一修行僧にすぎなかった宗叡が友である真如に修行の場を提供できたとは到底考えにくい。
- (11) 本稿では、佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究 附校訂『入唐五家伝』（高志書院、二〇一五年）所収「真如親王入唐略記」に収録されている「頭陀親王入唐略記」を使用する。
- (12) 佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究 附校訂『入唐五家伝』（前掲註11書）所収「校訂『入唐五家伝』」に収録されている「禪林寺僧正伝」の脚注18には、高岳親王の入唐年について「頭陀親王入唐略記」では貞観三年説をとっているとある。しかし、その記述「貞観三年三月、親王入唐を許さる」は入唐の許可が出たことを述べているのであって、その後の記述から実際に入唐したのは翌年であることは明らかで、脚注18の記載は誤りである。
- (13) 馬淵和夫「インド・中国における悉曇学」（『日本韻学史の研究』I所収、臨川書店、一九六五年）、佐伯有清「高丘親王入唐記―廢太子と虎害伝説の真相―」（前掲註4書、川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」（『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』一三、二〇一一年）。
- (14) 『大日本仏教全書』二「仏教書籍目録第二」所収（大法輪閣、二〇〇七年）。
- (15) 川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」（前掲註13論文）。
- (16) 『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月五・七日条、六月六・十一日条。
- (17) 『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月十六日条。
- (18) 『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月二十三日条。
- (19) 『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）五月十七・十八日条。この「唐決」は現存しており、『日本大藏經』天台宗顯教章疏2（藏經書

- 院、一九二〇年)に「円澄疑問 広修決答」として収載されている。
- (20) 『入唐求法巡礼行記』開成四年(八三九)七月二十三日条。
- (21) 高見寛恭「入唐八家の密教相承について(三)」(『密教文化』一三〇、一九八〇年)。なお川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」(前掲註13論文)も同様の見解を述べている。
- (22) 小野勝年『入唐求法行歴の研究 智証大師円珍篇』下の四三五頁註(上)には、「尋至天台山、次於大華嚴寺。大華嚴寺、在五臺山臺懷鎮、非在天台山矣。北臺之誤歟」と記されている。また川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」(前掲註13論文)は、「天台山」は「五台山」の誤りとみるか、時間的に錯誤があり、もし天台山を訪れたとしても、宗叡が帰国する直前であろうとする。しかし【史料3】を読むかぎり、帰国時も相当混乱していたことが窺われ、宗叡一行のみが天台山への巡行をおこなう時間的余裕はまずなかったとみるべきではないか。
- (23) 拙稿「入唐僧の情報ネットワーク—日本古代における文化移植の一樣相—」(『円仁と石刻の史料学』所収、高志書院、二〇一一年)、および拙稿「入唐僧円珍：日本天台宗門派之祖」(『浙江大学学报—人文社会科学版』四五一三、二〇一五年)。
- (24) 拙稿「入唐僧の情報ネットワーク—日本古代における文化移植の一樣—」(前掲註23論文)。
- (25) 『大日本仏教全書』二、仏教書籍目録第二所収(前掲註14書)。
- (26) 宗叡の「書写請来法門等目錄」の奥書にみえる「大唐咸通六年」という日付について、杉本直治郎「入唐年次問題」(『真如親王伝研究—高丘親王伝考—』所収、吉川弘文館、一九六五年)は「咸通五年」の誤りとし、川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」(前掲註13論文)もそれに従っている。しかし、【史料3】で真如一行が汴河に到着したのが「咸通六年二月」であり、その後一行と別れて五臺山に向かった宗叡らが長安に戻ってきたのも「咸通六年」とみえることからすると、宗叡らが長安西明寺の円載宅で咸通五年の六月から十月に法門等を書写することは不可能であり、現存目録のとおり「大唐咸通六年」のままとすべきはあるまいか。なお、馬淵和夫「悉曇学の日本渡来」(『日本韻学史の研究』I所収、前掲註13書)を参照。
- (27) なお「入唐記」(『大日本仏教全書』一四所収、大法輪閣、二〇〇七年)の禅林寺宗叡僧正の尻付にも「同(貞観)七年十一月十二日帰朝」とある。
- (28) 『日本三代実録』貞観十一年(八六九)正月二十七日乙酉条。
- (29) 『日本三代実録』貞観十六年(八七四)十二月二十九日癸未条。
- (30) 奈良県生駒郡都跡村(現奈良市佐紀町)にあった寺で、承和二年(八三五)に真如が楊梅宮の跡地を賜って創建したという。なお超昇寺については、渡辺恒信「超昇寺・楊梅陵・宇奈太理神社をめぐる」(『政治経済史学』三七四、一九九七年)を参照。
- (31) 宮内庁書陵部所蔵柳原家旧蔵「東寺長者補任」(弘仁十四年・寛永十一年)上(函架番号、柳・四八〇)。なお活字本としては、『続々群書類従』第二史伝部(続群書類従完成会、一九六九年)がある。

- (32) 『群書類従』第四輯補任部所収、『大日本仏教全書』六五史伝部四所収(鈴木学術財団、一九七二年。なお大法輪閣版『大日本仏教全書』には、「東大寺別当次第」は収録されていない)など。
- (33) 『東寺長者補任』元慶八年段にみえる「兼東大寺別当」の「別当」にあたる部分の右側には、「尻付真言宗東寺」と傍書されている。この元慶八年は宗叡が卒去した年にあたるため、宗叡の略歴が記されている。ところがそこには、彼が東寺別当に就任した記載がみえないことから、「兼東大寺別当」の右側に「尻付真言宗東寺」との傍書が追記されたのかもしれない。
- (34) 『日本三代実録』元慶三年(八七九)五月八日丁酉条。
- (35) 『史料17』には「元慶三年四月、太上天皇は円覚寺に遷御して、別落入道し」とあるが、『日本三代実録』元慶三年五月四日癸巳条には「太上天皇、清和院より遷りて粟田院に御す。即ち是れ右大臣藤原朝臣の山莊にして、鴨水の東に在るなり」とみえ、円覚寺(粟田院)への遷御を五月のこととしている(出家は五月八日)。本稿では、『史料17』の日付を誤りとみなして考察を進めることとする。
- (36) 吉田一彦「宗叡の白山入山をめぐって―九世紀における神仏習合の進展(二)―」(『佛教史研究』五〇、二〇一二年)。
- (37) 宗叡の弟子禪念については、佐伯有清「高丘親王入唐記―廃太子と虎害伝説の真相―」(前掲註4書)、川尻秋生「入唐僧宗叡と請来典籍の行方」(前掲註13論文)などを参照。
- (38) 福山敏男「観心寺の創立について」(『福山敏男著作集』三所収、中央公論美術出版、一九八三年、初出は一九七八年)。
- (39) 藪田香融「平安仏教の成立」(家永三郎監修『日本仏教史』一所収、法蔵館、一九六七年)。
- (40) 柳田甫「入唐五家伝」の編纂とその意義」(佐藤長門編『古代東アジアの仏教交流』所収、勉誠出版、二〇一八年)。
- (41) 常暁の入唐については拙稿「太元帥法の請来とその展開」(佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究 附校訂「入唐五家伝」』所収、前掲註40書、初出は一九九一年)を、円行の入唐については拙稿「入唐僧円行に関する基礎的考察」(同右書所収、初出は一九九四年)をそれぞれ参照。
- (42) 小林聖「遣唐僧による請来目録作成の意義」(佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究 附校訂「入唐五家伝」』所収、前掲註40書、初出は二〇一一年)。
- (43) 頼富本宏「宗叡請来の密教図像―特に理趣経曼荼羅を中心として―」(『密教大系』第十一卷 密教の美術Ⅱ』所収、法蔵館、一九九〇年、初出は一九九〇年)、鍵和田聖子「禅林寺宗叡請来資料の後代への影響―理趣経十八会曼荼羅と『理趣経秘要抄』を中心に―」(『印度學佛教學研究』六六―二、二〇一八年)など。

禅林寺宗叡の入唐とその後

关键词：真如 五台山 千僧供养 清和天皇 护持僧

摘要

宗叡是平安时代前期的密教僧人，名列“入唐八家”之一。他身为幼小的惟仁亲王（后来的清和天皇）的近侍，为满足亲王心愿而决定赴五台山巡礼，终于在贞观四年（862，唐咸通三年）随真如一行渡海入唐。入唐后的宗叡一度与真如一行一起行动，但在汴州从玄庆阿闍梨受法灌顶，学习金刚界法，之后为举行清和天皇所愿千僧供养，而与一行分别，前往五台山。宗叡抵达五台山后，先访问了西台的“维摩诘（谈）石”，然后前往东台的“那罗延窟”。他之所以知道这些圣迹，应是因为他从圆仁巡礼五台山的经历中获知。宗叡在大华严寺千僧供养结束之后，前往长安，在青龙寺法全处学习灌顶和胎藏界法，又寻访慈恩寺的造玄、兴善寺的智慧轮等，学习密教。事实上，宗叡所师从的这些中国僧人也曾为圆仁、圆珍等传授佛法。由此可见，宗叡的修行几乎都是基于前辈僧人的经验和信息。宗叡于贞观七年返回日本，因其与清和天皇有旧，而就任权律师、权少僧都，并于元庆三年被任命为僧正。清和天皇禅位后，于元庆三年剃发出家，即从宗叡受戒。清和巡行山城、大和、摄津等地的名山佛寺时，宗叡也从之同行。不过，目前尚未发现相关史料，可借以证明宗叡是否在清和临终之时侍奉左右。